



# 「薬剤耐性」に関する調査

【報告書】

# 目次

---

調査概要	P3
【Summary】①【家畜飼養者 まとめ】	P5
【Summary】②【臨床獣医師 まとめ】	P6
Executive Summary	P7
Executive Summary（前年比較）	P8

## ◆調査結果詳細【家畜飼養者】

『平成29年度調査（薬剤耐性に関する認知度調査）』参加有無	P10
農場の飼養畜種、経営形態	P11
農場施設の飼養規模（1 / 2）	P12
農場施設の飼養規模（2 / 2）	P13
「薬剤耐性対策アクションプラン」への認知	P14
「細菌感染症治療」への認知	P15
「抗菌剤の薬剤耐性菌に対する影響」への認知	P16
「薬剤耐性菌の伝播に対する懸念」への認知	P17
「飼料に対する抗菌性飼料添加の有無」への認知	P18
「抗菌性飼料添加物に対する種類」への認知	P19
「抗菌剤の使用量を少なくする取組」への経験	P20
「病気の発生予防による抗菌剤の使用減少」への認知	P21
「抗菌剤の使用減少に対する飼養環境の改善やワクチン使用」への経験	P22

## ◆調査結果詳細【臨床獣医師】

『平成29年度調査（薬剤耐性に関する認知度調査）』参加有無	P24
獣医師の種別	P25
「薬剤耐性対策アクションプラン」への認知	P26
「動物用抗菌性物質製剤の慎重使用に関する考え方」への認知	P27
「抗菌剤の使用に対する選択・使用量」への意識	P28
「抗菌剤の使用減少に対する飼養環境の改善やワクチン使用」への指導経験	P29
「薬剤感受性試験」への実施状況	P30
「抗菌性飼料添加物に対する種類」への認知	P31

---

## I .調査概要

## 調査概要

調査目的	抗菌剤は畜産分野でも使用されており、畜産物の安全を確保し、引き続き国産畜産物への消費者の信頼に依っていくためには、関係者の薬剤耐性菌問題や抗菌剤の慎重な使用に関する理解・意識の向上が急務である。 このため、獣医師、家畜飼養者等の薬剤耐性に関する認知度を把握・検証するための調査を実施することとする。
調査手法	インターネットによるweb調査 (各都道府県、畜産団体等を通じて、対象者のアドレスに協力依頼文書及びアンケートに協力を 願い調査を行う)
対象者条件	全国の畜産業経営者・臨床獣医師
回収数	●家畜飼養者：324サンプル 『飼養畜種（牛：163サンプル）（豚：79サンプル）（鶏：82サンプル）』 ●臨床獣医師：385サンプル
調査期間	2018年11月5日（月）～12月20日（木）
備考	※報告書スコア n=30未満は参考値として、グレーハッチング

---

## II .Summary

# 【Summary】① 【家畜飼養者 まとめ】

## ■「薬剤耐性対策アクションプラン」の認知は2割半ば、飼養畜種別では全体的に『豚』が高い傾向にある。

- ▶ 全体では、「Q3. 薬剤耐性対策アクションプラン」への認知は24.7%。  
 その他、各設問では「Q5. 抗菌剤の薬剤耐性菌に対する影響の認知」「Q10. 病気の発生予防による抗菌剤の使用減少の認知」8割半ばで特に高い。  
 また、前年と比べ「Q8. 抗菌性飼料添加物に対する種類の認知」がやや低く、6.5pt下降した。
- ▶ 飼養畜種別では『豚』の認知・経験などが、全体的に高い傾向が見受けられた。

	n	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q10	Q8	Q9	Q11
		存知すか	で症す。性	増えを	ことを	ある飼料と混ぜ	を飼料と混ぜ			
※n=家畜飼養者 全体 (単位: %)										
※TOP 1 BOX (知っている・ある) スコアを掲載										
※nが30未満の時は参考値										
※「0」は「-」として表記										
2018年 全体 +10ポイント										
2018年 全体 +5ポイント										
2018年 全体 -5ポイント										
2018年 全体 -10ポイント										
2018年 全体	324	24.7	80.9	84.9	68.8	81.5	84.6	68.6	56.1	76.6
農場の飼養畜	36	25.0	80.6	94.4	80.6	91.7	80.6	33	72.7	54.5
【肉用牛】繁殖	2	50.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	2	100.0	50.0
【肉用牛】哺育・育成	24	37.5	79.2	79.2	58.3	91.7	87.5	22	68.2	72.7
【肉用牛】一貫	14	21.4	78.6	78.6	35.7	78.6	71.4	11	45.5	63.6
【肉用牛】その他	4	50.0	75.0	75.0	75.0	100.0	100.0	4	75.0	50.0
【乳用牛】乳用牛	83	12.0	74.7	80.7	55.4	62.7	72.3	52	44.2	44.2
【豚】一貫	70	40.0	92.9	91.4	85.7	95.7	95.7	67	83.6	56.7
【豚】繁殖	2	50.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	2	100.0	100.0
【豚】肥育	4	50.0	100.0	75.0	50.0	25.0	75.0	1	100.0	100.0
【豚】その他	3	66.7	66.7	66.7	66.7	66.7	66.7	2	100.0	50.0
【肉用鶏】肉用鶏	14	14.3	85.7	85.7	78.6	100.0	85.7	14	85.7	71.4
【採卵鶏】採卵鶏 (大雑業・育成業を含む)	62	14.5	74.2	82.3	67.7	79.0	91.9	49	65.3	53.1
【種鶏】種鶏	6	33.3	83.3	83.3	83.3	83.3	83.3	5	80.0	60.0
飼養畜種 (牛・豚・鶏)	163	20.9	77.3	83.4	60.7	76.1	77.3	124	58.1	54.0
牛	79	41.8	92.4	89.9	83.5	91.1	93.7	72	84.7	58.3
豚	82	15.9	76.8	82.9	70.7	82.9	90.2	68	70.6	57.4
鶏	2	21.2	76.6	81.8	60.6	73.0	75.2	100	56.0	54.0
飼養規模 (牛)	137	21.2	76.6	81.8	60.6	73.0	75.2	100	56.0	54.0
200頭未満	23	21.7	78.3	91.3	60.9	91.3	87.0	21	61.9	47.6
200頭以上3000頭未満	3	-	100.0	100.0	66.7	100.0	100.0	3	100.0	100.0
3000頭以上	47	36.2	91.5	89.4	78.7	89.4	91.5	42	83.3	54.8
飼養規模 (豚)	32	50.0	93.8	90.6	90.6	93.8	96.9	30	86.7	63.3
3000頭未満	28	7.1	71.4	75.0	64.3	78.6	78.6	22	77.3	59.1
3000頭以上	38	18.4	81.6	84.2	68.4	89.5	94.7	34	67.6	58.8
飼養規模 (鶏)	16	25.0	75.0	93.8	87.5	75.0	100.0	12	66.7	50.0
1万羽未満	12	25.0	75.0	93.8	87.5	75.0	100.0	12	66.7	50.0
1万羽以上10万羽未満	16	25.0	75.0	93.8	87.5	75.0	100.0	12	66.7	50.0
10万羽以上	320	29.4	77.8	80.6	68.8	80.3	86.3	257	75.1	51.8
2017年 全体	320	29.4	77.8	80.6	68.8	80.3	86.3	257	75.1	51.8
【差分】2018年 全体 - 2017年 全体		-4.7	3.1	4.3	-	1.2	-1.7	-6.5	4.3	-3.1

※Q8・Q9 : 「抗菌性飼料添加物が混ぜられている飼料と混ぜられていない飼料がある」の認知者ベース ※Q11 : 「飼養環境の改善やワクチンの使用により、病気の発生を予防することが、抗菌剤の使用を減らすこと」の認知者ベース

# 【Summary】② 【臨床獣医師 まとめ】

## ■「薬剤耐性対策アクションプラン」の認知は5割、畜種別では『鶏』が高い傾向にある。

- ▶ 全体では、「Q3. 薬剤耐性対策アクションプラン」への認知は51.7%。  
その他、各設問への認知や経験では「Q5. 抗菌剤の使用に対する選択・使用量への意識」91.9%が最も高い。  
また、前年と比べ「Q3. 薬剤耐性対策アクションプラン」の認知がやや高く、7.3pt上昇した。
- ▶ 畜種別では『鶏の診療・衛生指導に従事する獣医師』のスコアが全体的に高い傾向が見受けられた。

	全体	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	
		存剤平 知耐成 で性2 す対8 か策年 。アに ク定 シめ ヨら ンれ プた ラ日 ン本 をの ご薬	本性「 的物畜 な質産 考製物 え剤生 方の産 」慎に を重お ご使用 存用る で関物 すす用 か。抗 。基菌	にとぶ おすと いるとは て「も、 心とに有 がい、効、 けう必な てこ要抗 いと最菌 まを小剤 す日限を か。頃の 。の使切 診療量選 療量選	「用適 を切 真な に診 断に 必要に 基づ 合いて 抗菌 剤の	こち的 とんで がに、 あよ飼 りる養 ま感衛 す染生 か。症管 。予理機 防の会 指善減 導やら しワす たク目	施用日 しに々 て当の いた診 まり療 す、に か薬お 。剤い 感て、 受。抗 性試菌 験剤の をの実 使	まが料 す混に かぜど 。らの れよ用 てうい いなた る抗治 か菌療 を性に 意飼お 識料い し添て て加、 い物飼
2018年 全体	385	51.7	80.3	91.9	88.1	76.1	61.0	
獣医師 (畜種別)	乳用牛の診療・衛生指導に従事する獣医師	255	44.7	80.0	90.2	87.1	81.5	51.0
	肉用牛の診療・衛生指導に従事する獣医師	259	45.2	78.8	91.1	88.8	71.8	56.4
	豚の診療・衛生指導に従事する獣医師	91	60.4	82.4	96.7	95.6	80.2	78.0
	鶏の診療・衛生指導に従事する獣医師	34	70.6	85.3	100.0	94.1	67.6	79.4
	その他	35	74.3	80.0	94.3	68.6	74.3	74.3
2017年 全体	534	44.4	77.0	90.8	87.8	73.6	58.4	
【差分】2018年 全体 - 2017年 全体		7.3	3.3	1.1	0.3	2.5	2.6	

※Q7スコア：TOP2BOX（「必ず実施する」+「時々実施する」）を掲載

# Executive Summary

---

## ●「日本の薬剤耐性対策アクションプラン」に対して、

**【家畜飼養者】は25%、【臨床獣医師】は52%が認知。**

- ☞ **【家畜飼養者】に対して**、「日本の薬剤耐性対策アクションプラン」は25%、「薬剤耐性菌が人と家畜の細菌感染症治療を難しくすること」は81%、「抗菌剤を使用すると、薬剤耐性菌が増えること」は85%、「薬剤耐性菌が畜産物等を介して人へ伝播することへの懸念」は69%が認知していた。
- ☞ **【臨床獣医師】に対して**、「日本の薬剤耐性対策アクションプラン」は52%、「畜産物生産における動物用抗菌性物質製剤の慎重使用に関する基本的な考え方」へは80%が認知していた。また、「適切な診断に基づいて抗菌剤の使用を真に必要な場合に限定する等」については92%が心がけており、「抗菌剤を使用する際の薬剤感受性試験」は76%が実施していたが、『必ず実施する』は6%にとどまる。

## ●「飼料にどのような抗菌性飼料添加物が混ぜられているか」に対して、

**【家畜飼養者】は69%が知っており、【臨床獣医師】の61%が意識している。**

- ☞ **【家畜飼養者】に対して**、「抗菌性飼料添加物が混ぜられている飼料と混ぜられていない飼料があること」は82%、そのうち「どのような抗菌性飼料添加物が含まれているか」を認知しているのは69%、「なるべく抗菌性飼料添加物が混ぜられていない飼料を使い抗菌剤の使用量を少なくする取組」をしているのは56%。

## ●「抗菌剤の使用を減らすためへの飼養環境の改善やワクチンの使用」に対して、

**【家畜飼養者】は77%が行ったことがあり、【臨床獣医師】の88%が指導したことがある。**

- ☞ **【家畜飼養者】に対して**、「飼養環境改善やワクチン使用により、病気の発生予防が、抗菌剤の使用を減らすことに繋がる」ことは85%が認知しており、そのうち77%が飼養環境の改善やワクチンを使用したことがある。



## Executive Summary（前年比較）

---

- 『今年度』と『前年度（平成29年度）』調査の参加者構成について、  
【家畜飼養者】では「乳用牛」がやや増加し、【臨床獣医師】は大きな変動はない。

- ☞ 『今年度調査』の参加の種別は、

【家畜飼養者】⇒「飼養畜種：牛」50%、「飼養畜種：豚」24%、「飼養畜種：鶏」25%となり、  
「乳用牛」が前年度調査からやや増加（前回調査+8.7pt）。

【臨床獣医師】⇒「獣医師種別：肉用牛」67%、「獣医師種別：乳用牛」66%、「獣医師種別：豚」24%、  
「獣医師種別：鶏」9%、「獣医師種別：その他」9%となり、  
いずれも前年度とほぼ同程度（前回調査±5.0pt未満）。

- 『前年度調査』へ参加していた割合は、【家畜飼養者】19%、【臨床獣医師】33%。

- ☞ 『前年度調査』へ参加した種別は、

【家畜飼養者】⇒「飼養畜種：牛」15%、「飼養畜種：豚」25%、「飼養畜種：鶏」18%。

【臨床獣医師】⇒「獣医師種別：肉用牛」34%、「獣医師種別：乳用牛」32%、  
「獣医師種別：豚」39%、「獣医師種別：鶏」29%、「獣医師種別：その他」31%。

- 『前年度調査』と薬剤耐性に関する認知と意識は、  
【家畜飼養者】【臨床獣医師】とも全体的に大きな違いはない。

- ☞ 前回調査と比較した結果、

【家畜飼養者】は、「飼料にどのような抗菌性飼料添加物が混ぜられているかの認知」がやや下降（前回調査-6.5pt）

【臨床獣医師】は、「日本の薬剤耐性対策アクションプランの認知」がやや上昇（前回調査+7.3pt）するが、  
他の項目で全体的に大きな変動はみられない（前回調査±5.0pt未満）。

---

## Ⅲ. 調査結果詳細 【家畜飼養者】

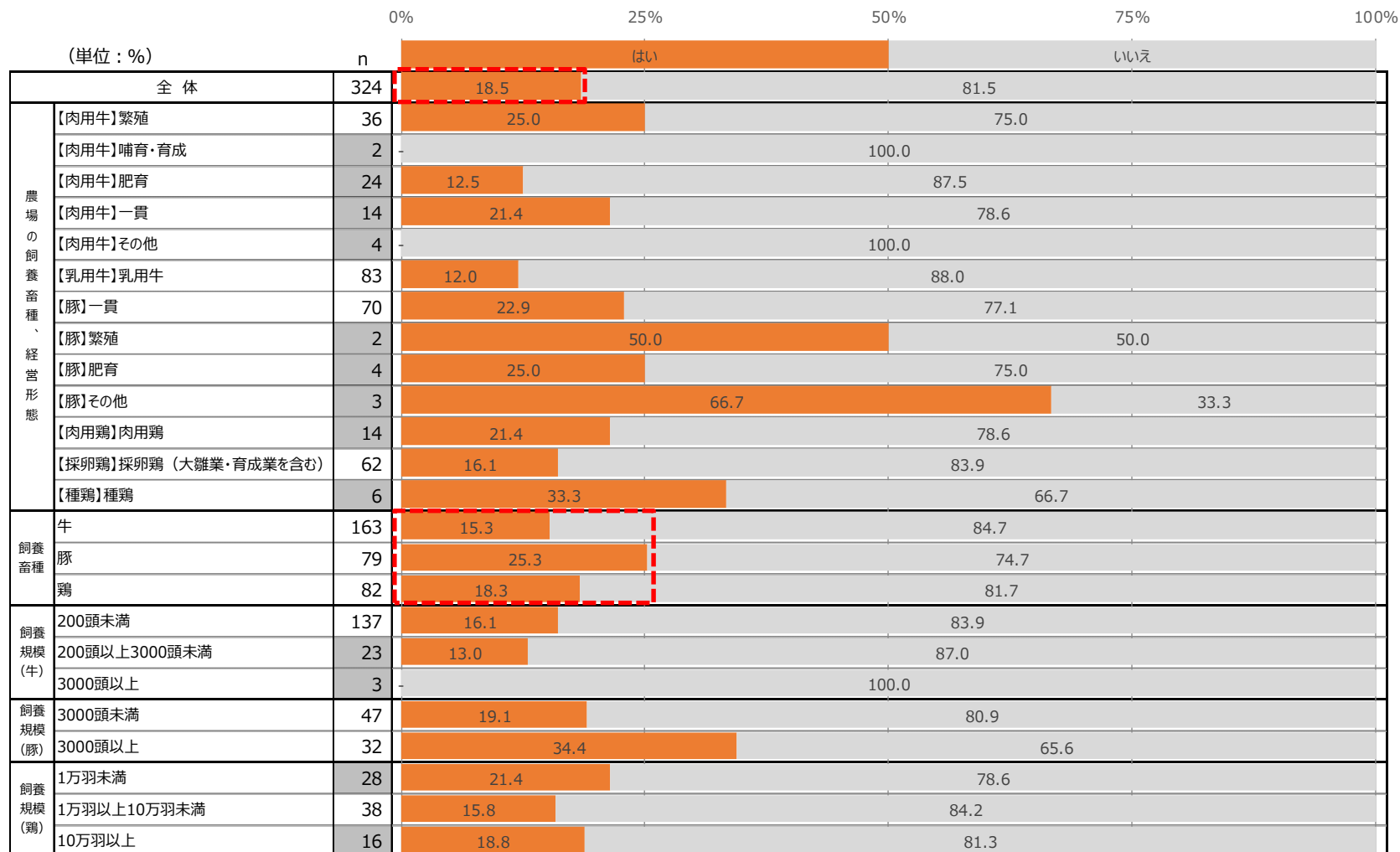
# 『平成29年度調査（薬剤耐性に関する認知度調査）』参加有無

## ■ 前回調査への参加経験は2割弱、飼養畜種別では『豚』が最も高く2割半ばを占める。

➤ 全体では「はい」が18.5%を占める。飼養畜種別では『牛』15.3%、『豚』25.3%、『鶏』18.3%。『豚』がやや高く全体を5pt以上上回る。

n=全体（単位：%）

Q1. あなたは、平成29年度の薬剤耐性に関する認知度調査（WEBアンケート）に参加されましたか。（1つ選択）



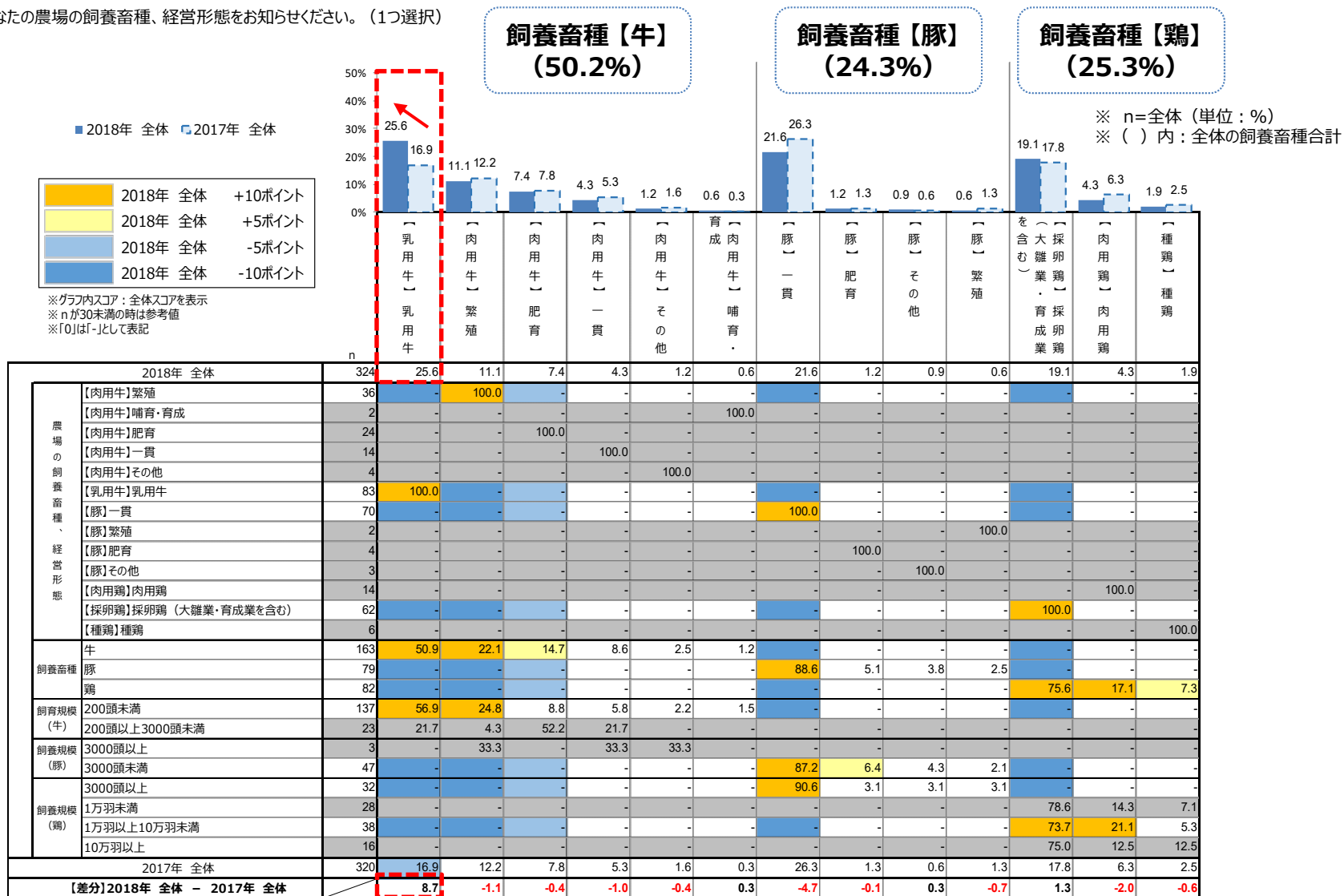
※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

# 農場の飼養畜種、経営形態

## ■「農場の飼養畜種」は【牛】が最も多く5割を占め、【鶏】【豚】が続く。

- ▶ 全体では「飼養畜種：牛」が最も多く50.2%、次いで「飼養畜種：鶏」25.3%、「飼養畜種：豚」24.3%が続く。「飼養畜種、経営形態」項目のなかでは、「【乳用牛】乳用牛」が最も高く25.6%、前回と比べ8.7pt上昇した。

Q2-1. あなたの農場の飼養畜種、経営形態をお知らせください。(1つ選択)



# 農場施設の飼養規模 (1 / 2)

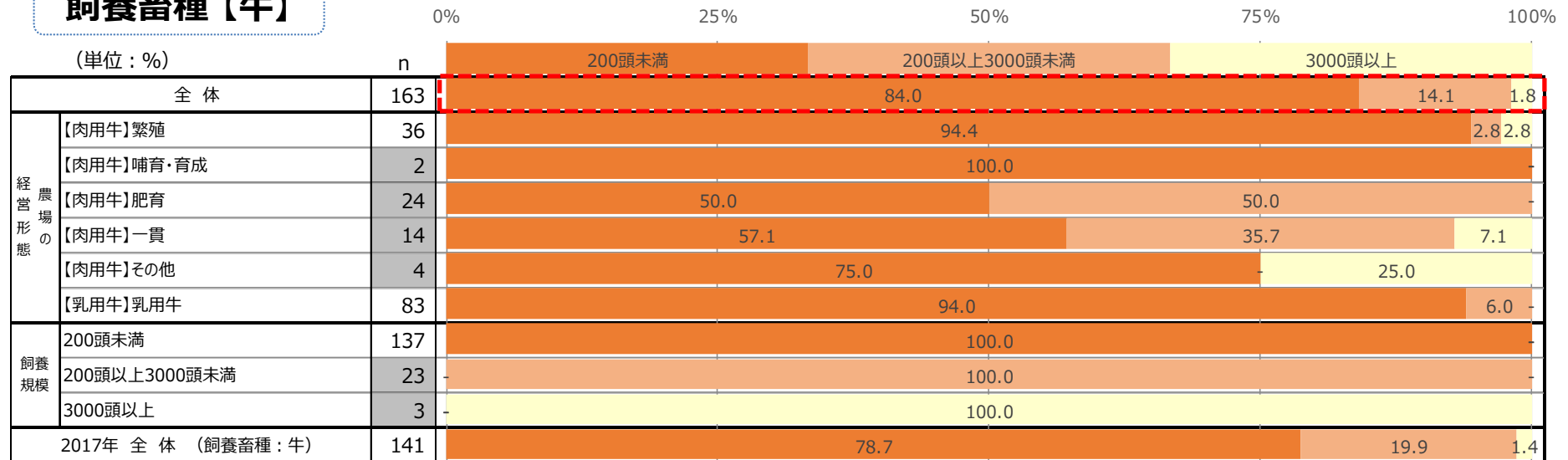
## ■ 飼養畜種【牛】では「200頭未満」が約8割半ば、【豚】では「3000頭未満」が6割を占める

- 飼養畜種【牛】について、全体では「200頭未満」が最も多く84.0%、次いで「200頭以上3000頭未満」14.1%、「3000頭以上」1.8%が続く。
- 飼養畜種【豚】について、全体では「3000頭未満」が多く59.5%、次いで「3000頭以上」が40.5%を占める。

n=全体 (単位: %)

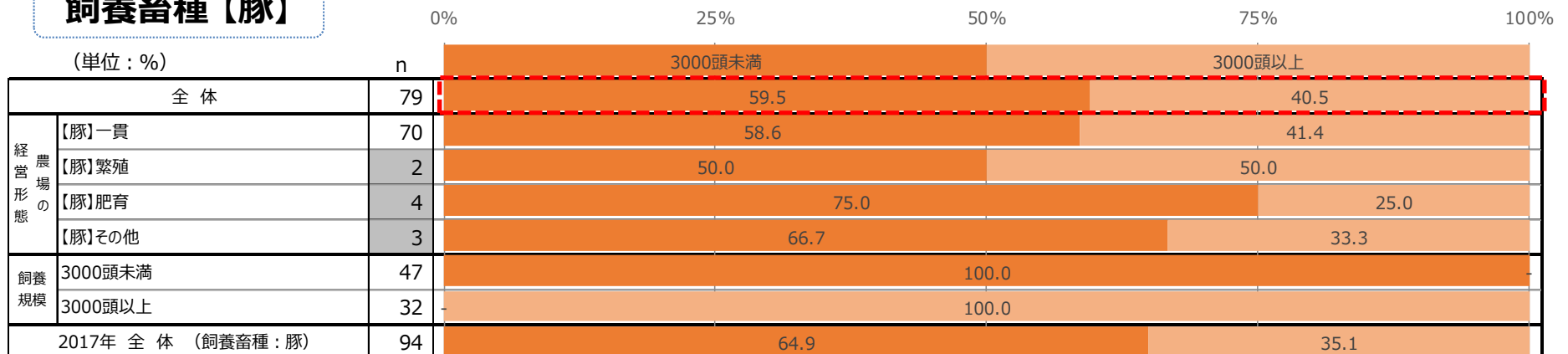
Q2-2. あなたの農場施設の飼養規模をお知らせください。(それぞれ1つずつ選択)

### 飼養畜種【牛】



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

### 飼養畜種【豚】



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

# 農場施設の飼養規模 (2 / 2)

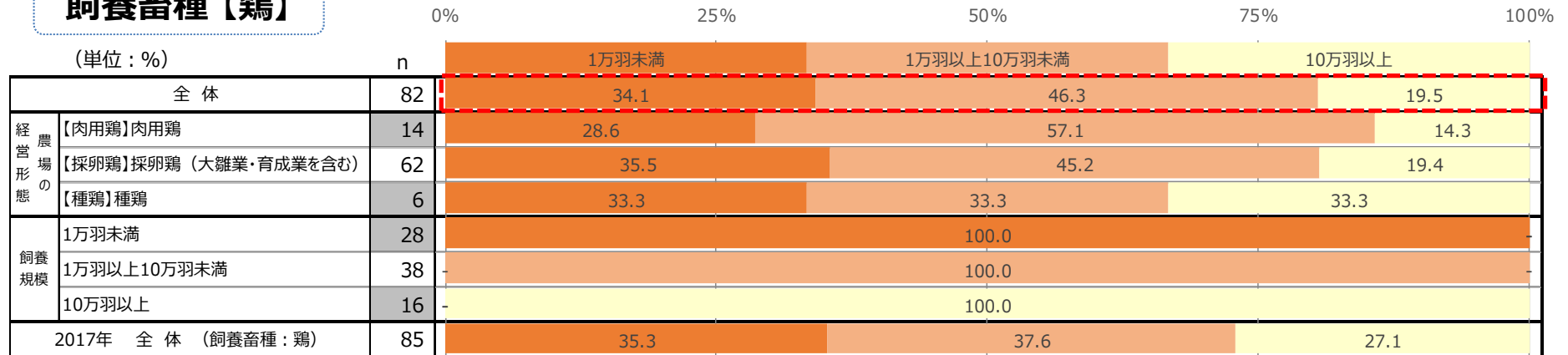
## ■ 飼養畜種【鶏】では「1万羽以上10万羽未満」が4割半ばを占める

➤ 飼養畜種【鶏】について、全体では「1万羽以上10万羽未満」が最も多く46.3%、次いで「1万羽未満」34.1%、「10万羽以上」19.5%が続く。

n=全体 (単位: %)

Q2-2. あなたの農場施設の飼養規模をお知らせください。(それぞれ1つずつ選択)

### 飼養畜種【鶏】



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

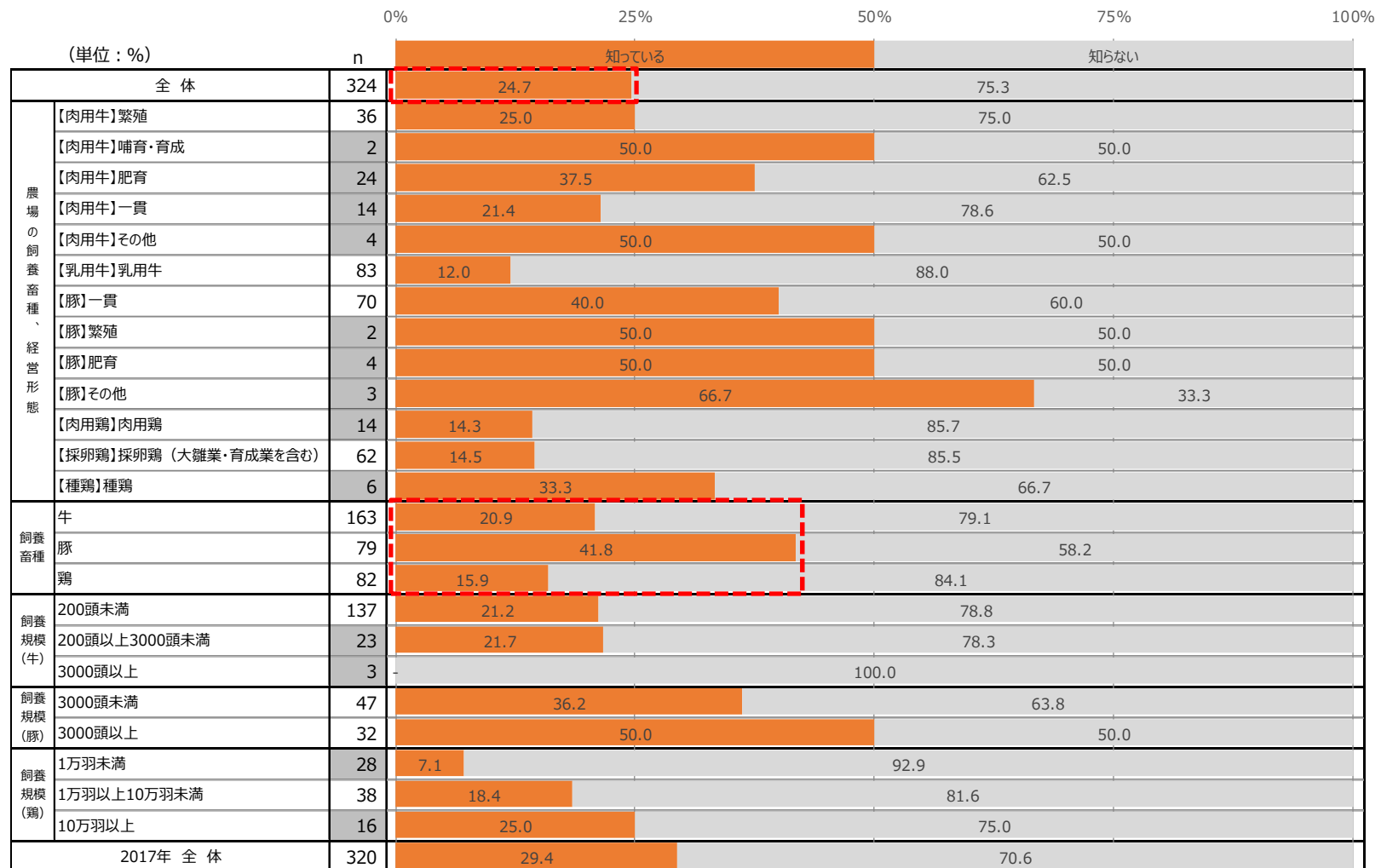
# 「薬剤耐性対策アクションプラン」への認知

## ■「薬剤耐性対策アクションプラン」への認知は2割半ば、飼養畜種別では『豚』が最も高く4割を占める。

- ▶ 全体では「知っている」が24.7%を占める（前回調査から-4.7pt）。飼養畜種別では『牛』20.9%、『豚』41.8%、『鶏』15.9%。『豚』が高く全体を10pt以上上回る。

n=全体（単位：%）

Q3. 平成28年に定められた日本の薬剤耐性対策アクションプランをご存知ですか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

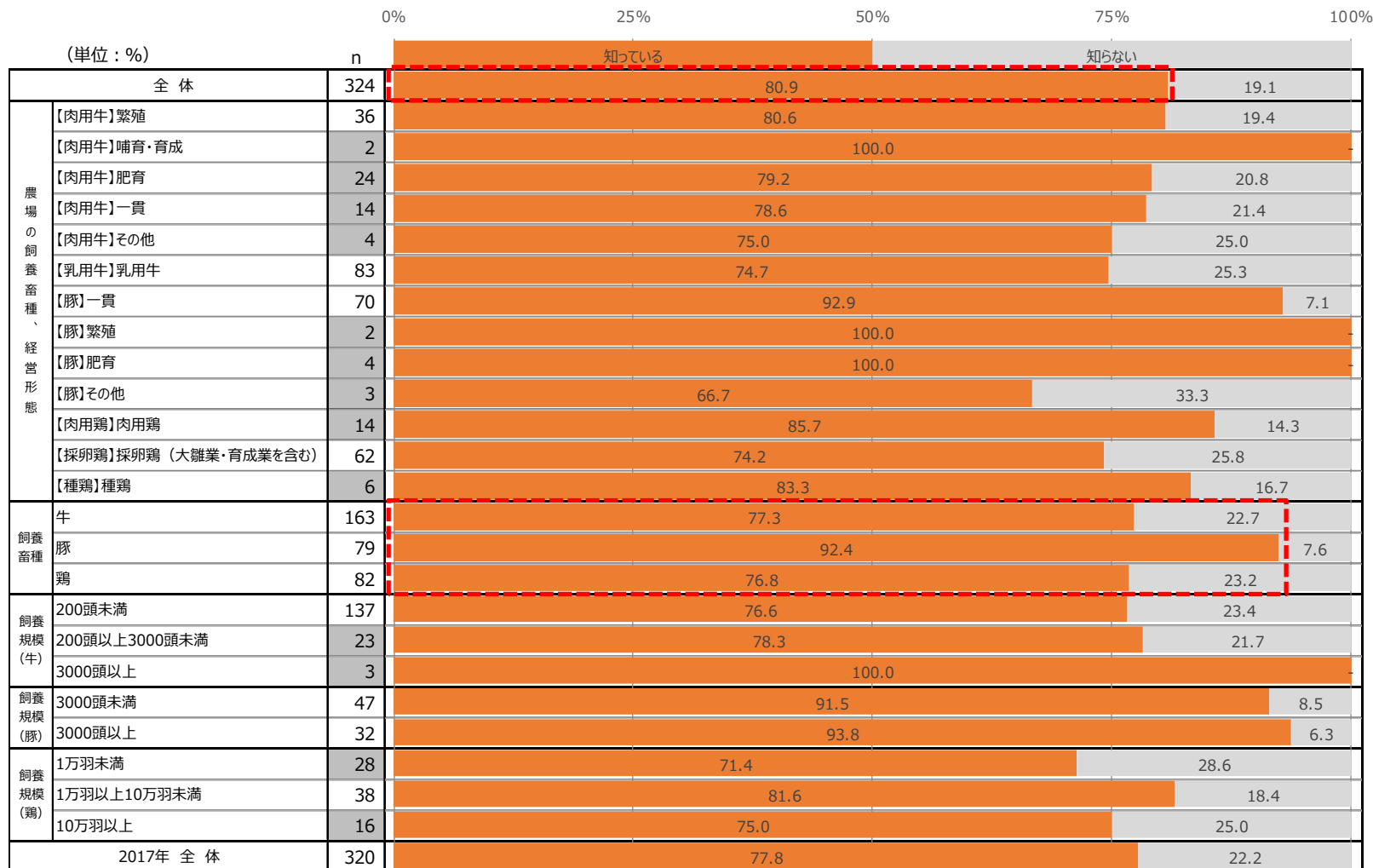
# 「細菌感染症治療」への認知

## ■「細菌感染症治療を難しくすること」への認知は8割、飼養畜種別では『豚』が最も高く約9割を占める。

- ▶ 全体では「知っている」が80.9%を占める（前回調査から+3.1pt）。飼養畜種別では『牛』77.3%、『豚』92.4%、『鶏』76.8%。『豚』が高く全体を10pt以上上回る。

n=全体（単位：%）

Q4. 薬剤耐性菌が人と家畜の細菌感染症治療を難しくすることをご存知ですか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記



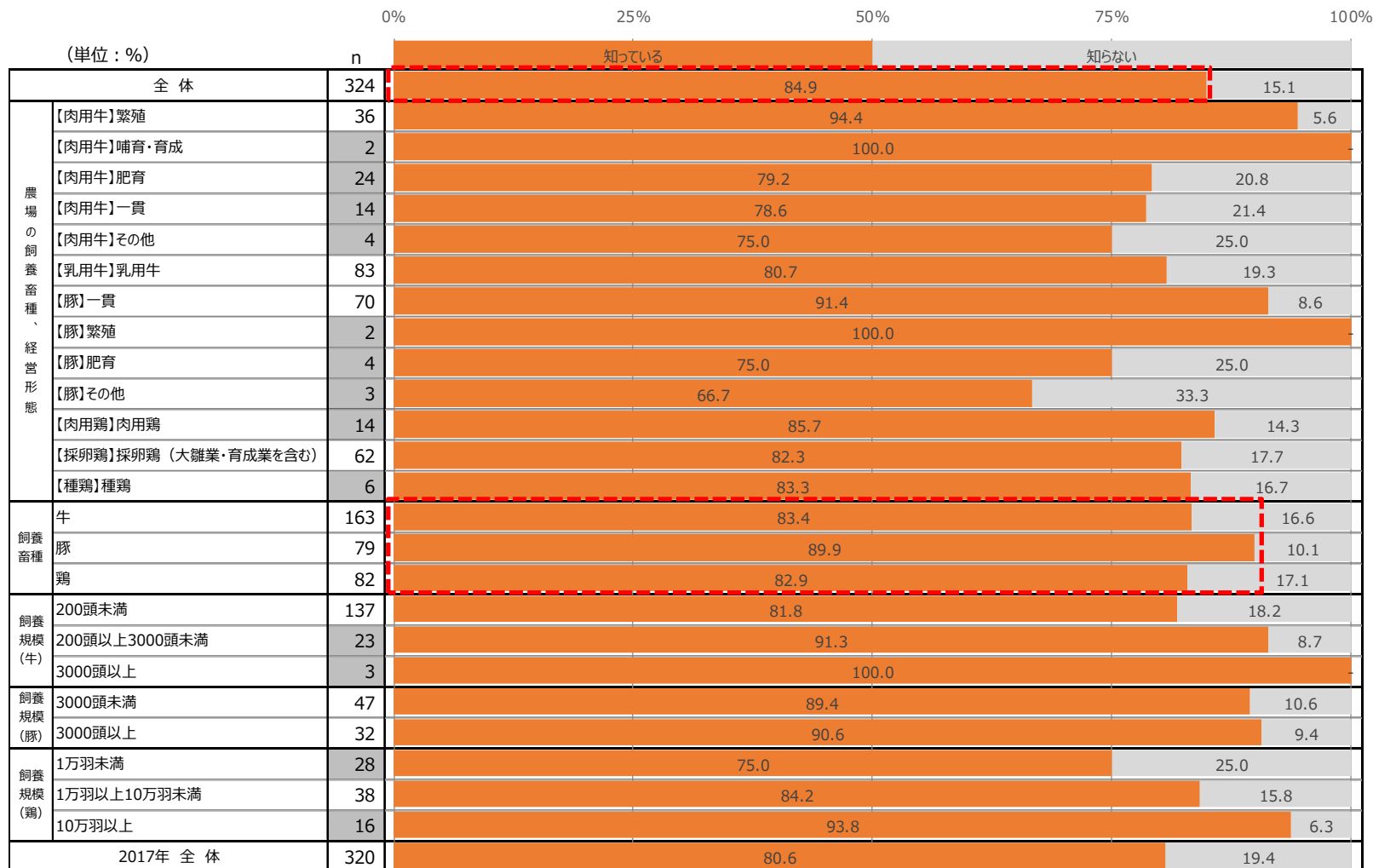
# 「抗菌剤の薬剤耐性菌に対する影響」への認知

## ■「薬剤耐性菌が増えること」への認知は8割半ば、飼養畜種別では『豚』が最も高く9割を占める。

- ▶ 全体では「知っている」が84.9%を占める（前回調査から+4.3pt）。飼養畜種別では『牛』83.4%、『豚』89.9%、『鶏』82.9%。『豚』がやや高く全体を5pt上回る。

n=全体（単位：%）

Q5. 抗菌剤を使用すると、薬剤耐性菌が増えることをご存知ですか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

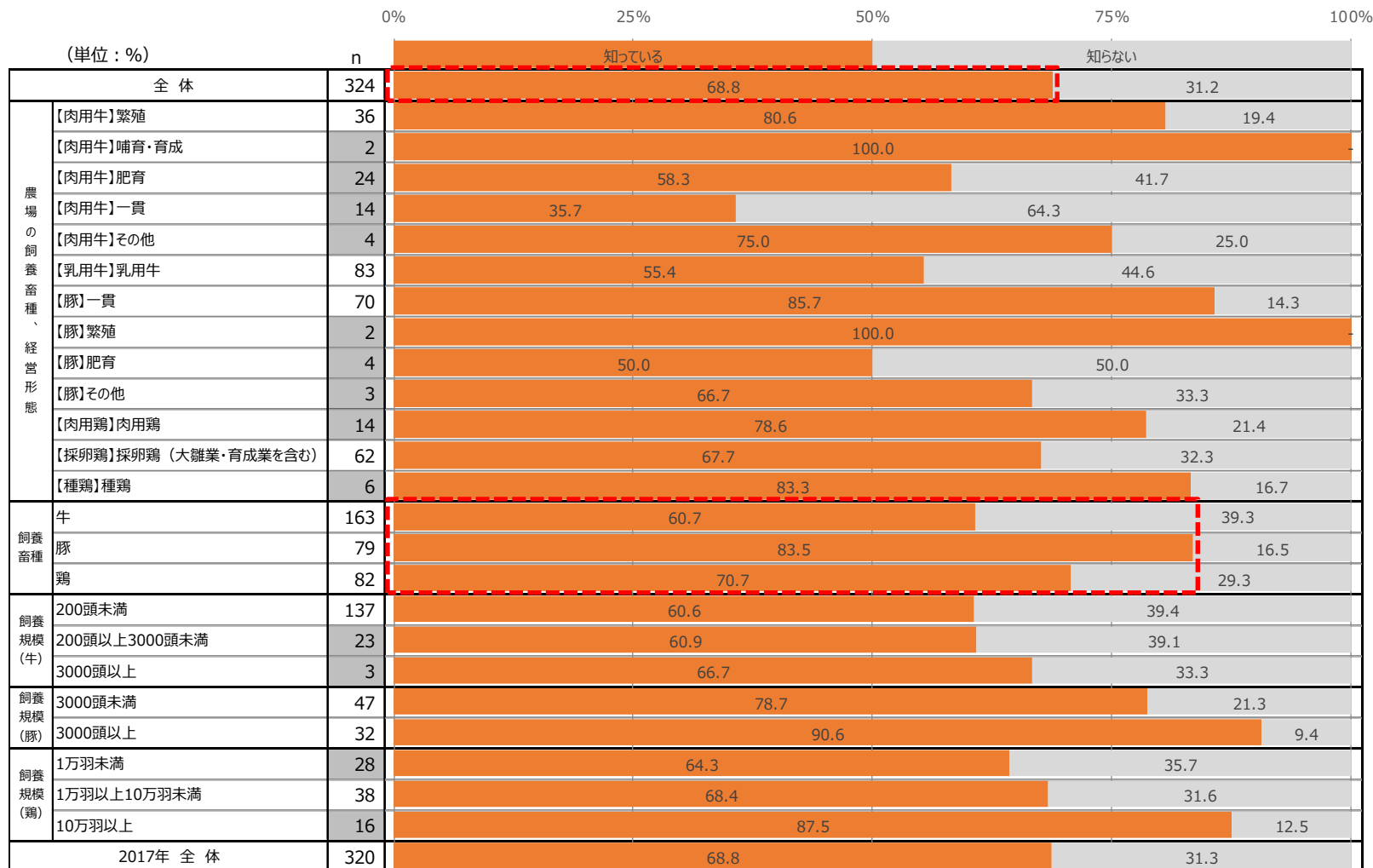
# 「薬剤耐性菌の伝播に対する懸念」への認知

## ■「人へ伝播することが懸念されていること」への認知は7割弱、飼養畜種別では『豚』が最も高く8割以上を占める。

- ▶ 全体では「知っている」が68.8%を占める（前回調査と同率）。飼養畜種別では『牛』60.7%、『豚』83.5%、『鶏』70.7%。『豚』が高く全体を10pt以上上回る。

n=全体（単位：%）

Q6. 薬剤耐性菌が畜産物等を介して人へ伝播することが懸念されていることをご存知ですか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

# 「飼料に対する抗菌性飼料添加の有無」への認知

## ■「飼料に対する抗菌性飼料添加有無」への認知は8割、飼養畜種別では『豚』が最も高く9割を占める。

- ▶ 全体では「知っている」が81.5%を占める（前回調査から+1.2pt）。飼養畜種別では『牛』76.1%、『豚』91.1%、『鶏』82.9%。『豚』がやや高く全体を5pt以上上回る。

n=全体（単位：%）

Q7. 抗菌性飼料添加物（飼料工場で配合される抗菌剤）が混ぜられている飼料と混ぜられていない飼料があることをご存知ですか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

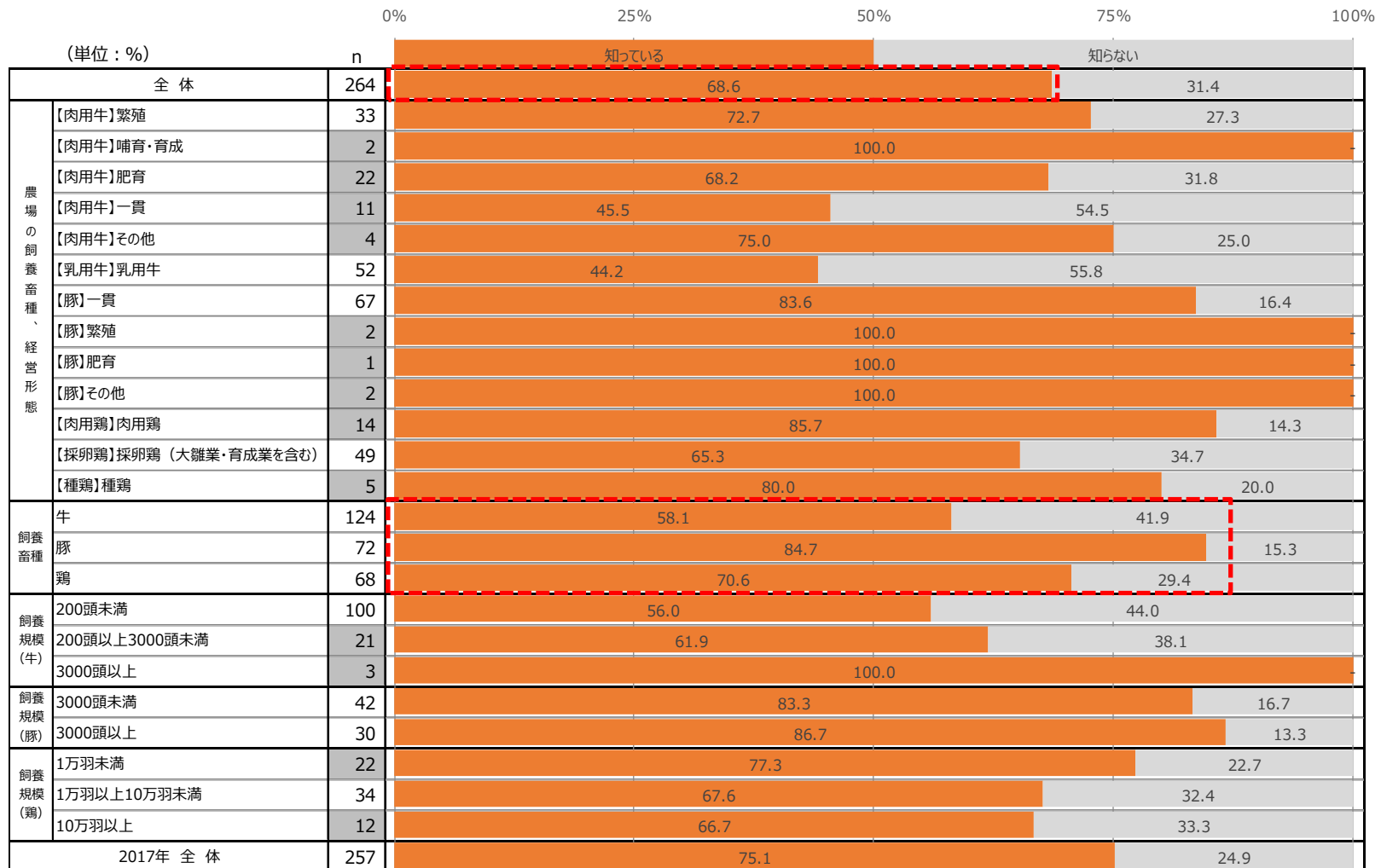
# 「抗菌性飼料添加物に対する種類」への認知

## ■「抗菌性飼料添加物に対する種類」への認知は7割弱、飼養畜種別では『豚』が最も高く8割半ばを占める。

- ▶ 全体では「知っている」が68.6%を占める（前回調査から-6.5pt）。飼養畜種別では『牛』58.1%、『豚』84.7%、『鶏』70.6%。『豚』がやや高く全体を10pt以上上回る。

n=抗菌性飼料添加物が混ぜられている飼料と混ぜられていない飼料があること認知者ベース（単位：%）

Q8. 使用している飼料にどのような抗菌性飼料添加物（飼料工場で配合される抗菌剤）が混ぜられているかご存知ですか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

# 「抗菌剤の使用量を少なくする取組」への経験

## ■「抗菌剤の使用量を少なくする」への取組経験は『ある』が約5割半ば、飼養畜種別では大きな差はみられない。

- ▶ 全体では「ある」が56.1%を占める（前回調査から+4.3pt）。飼養畜種別では大きな差はみられない。（『牛』54.0%、『豚』58.3%、『鶏』57.4%）  
また、その他の属性では、『飼養規模（豚）：3000頭以上』63.3%がやや高く全体を5pt以上上回る。

n=抗菌剤飼料添加物が混ぜられている飼料と混ぜられていない飼料があることの認知者ベース（単位：%）

Q9. なるべく抗菌剤飼料添加物（飼料工場で配合される抗菌剤）が混ぜられていない飼料を使うことで、抗菌剤の使用量を少なくする取組を行ったことがありますか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

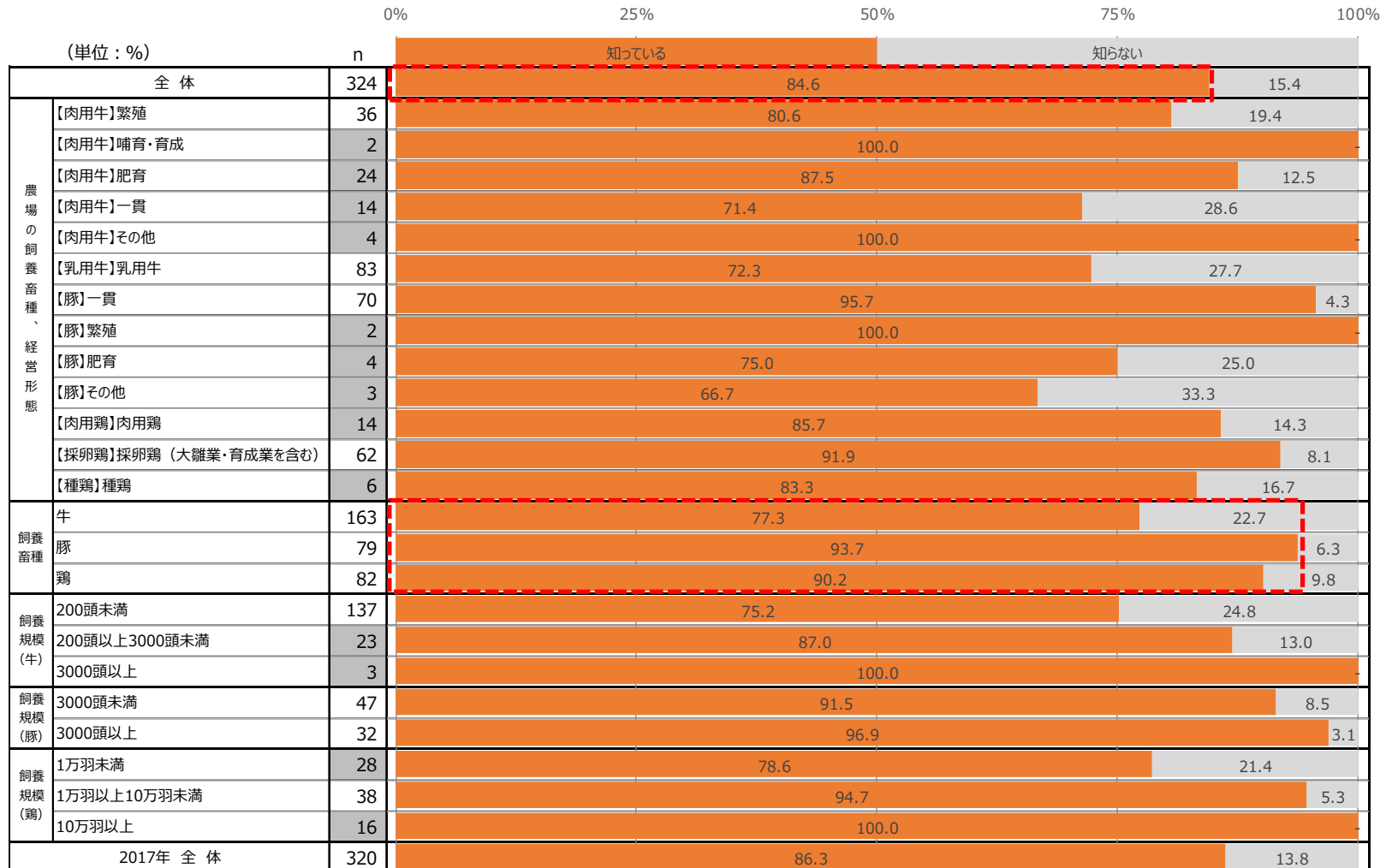
# 「病気の発生予防による抗菌剤の使用減少」への認知

## ■「病気の発生予防による抗菌剤の使用減少」への認知は8割半ば、飼養畜種別では『豚・鳥』が高く9割以上を占める。

- ▶ 全体では「知っている」が84.6%を占める（前回調査から-1.7pt）。飼養畜種別では『牛』77.3%、『豚』93.7%、『鶏』90.2%。『豚』と『鶏』がやや高く全体を5pt以上上回る。

n=全体（単位：%）

Q10. 飼養環境の改善やワクチンの使用により、病気の発生を予防することが、抗菌剤の使用を減らすことをご存知ですか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

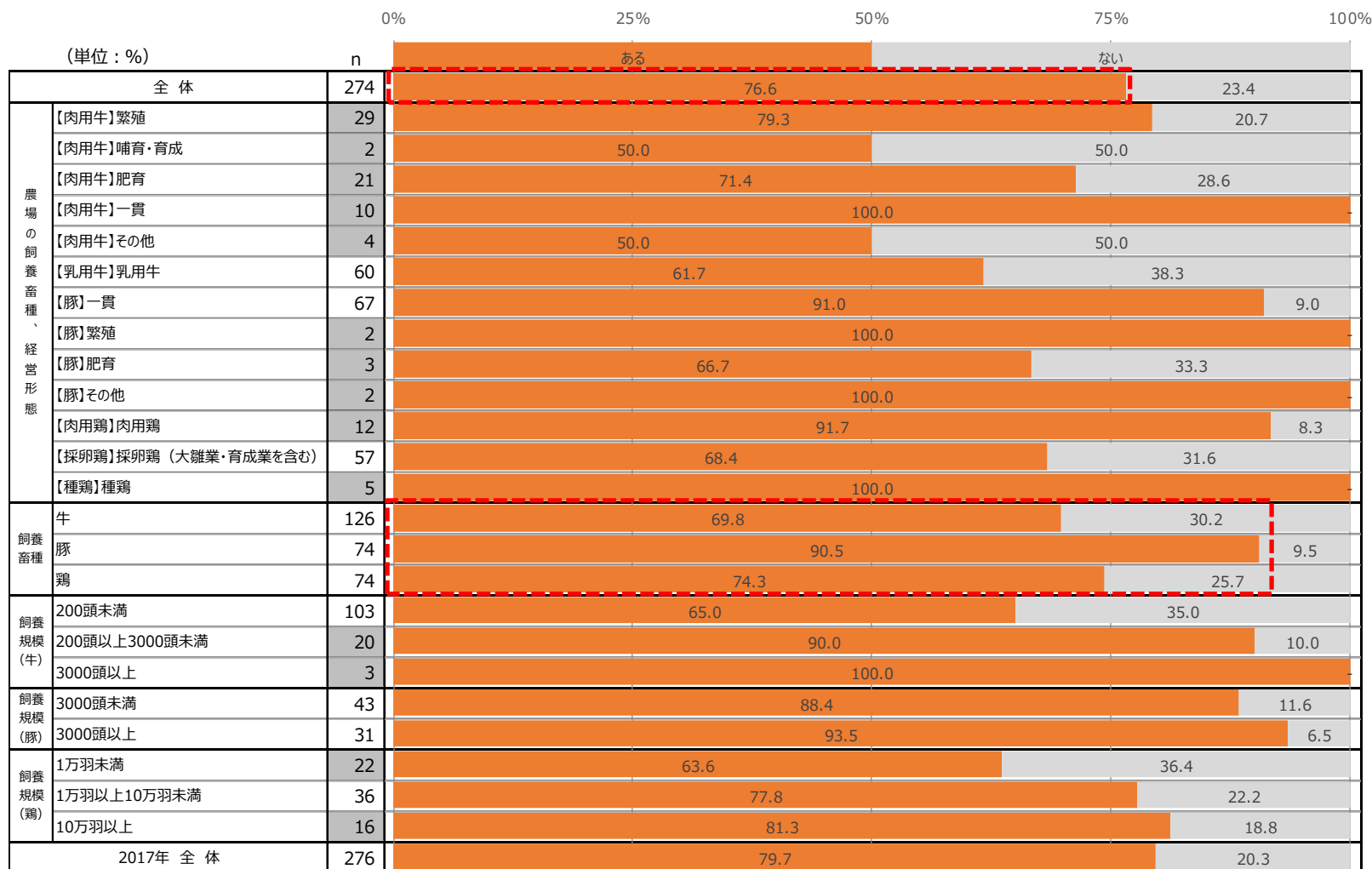
# 「抗菌剤の使用減少に対する飼養環境の改善やワクチン使用」への経験

## ■「飼養環境の改善やワクチンの使用」への経験は『ある』が約7割半ば、飼養畜種別では『豚』が最も高く9割を占める。

- ▶ 全体では「ある」が76.6%を占める（前回調査から-3.1pt）。飼養畜種別では『牛』69.8%、『豚』90.5%、『鶏』74.3%。『豚』が高く全体を10pt以上上回る。

n=飼養環境の改善やワクチンの使用により、病気の発生を予防することが、抗菌剤の使用を減らすことの認知者ベース（単位：%）

Q11. 抗菌剤の使用を減らすために飼養環境の改善やワクチンの使用を行ったことがありますか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

---

## IV. 調査結果詳細 【臨床獣医師】



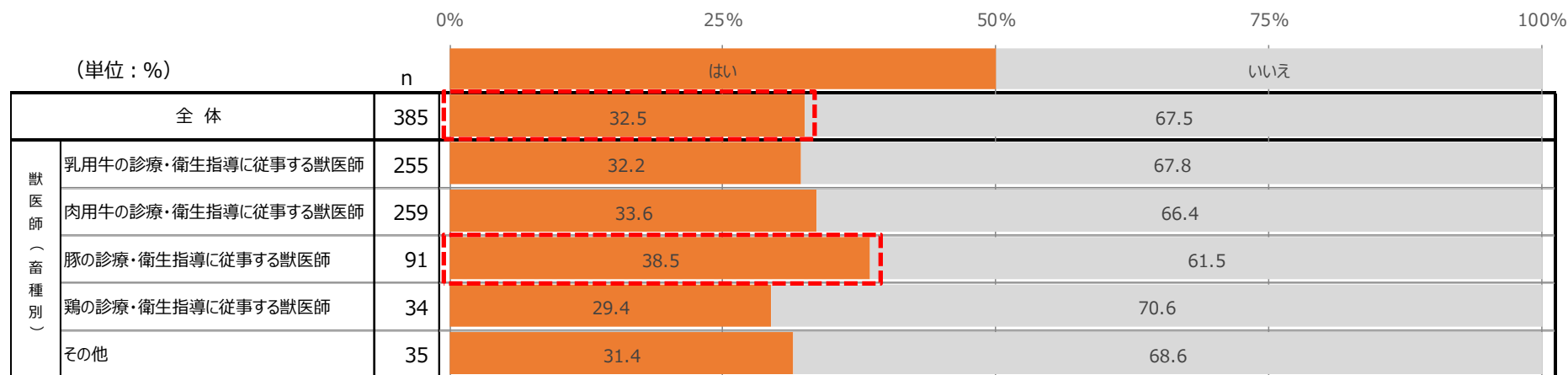
# 『平成29年度調査（薬剤耐性に関する認知度調査）』参加有無

## ■ 前回調査への参加経験は3割強、『豚の診療・衛生指導に従事する獣医師』が最も高く4割弱を占める。

➤ 全体では「はい」が32.5%を占める。飼養畜種別では『豚の診療・衛生指導に従事する獣医師』38.5%がやや高く全体を5pt以上上回る。

n=全体（単位：%）

Q1. あなたは、平成29年度の薬剤耐性に関する認知度調査（WEBアンケート）に参加されましたか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

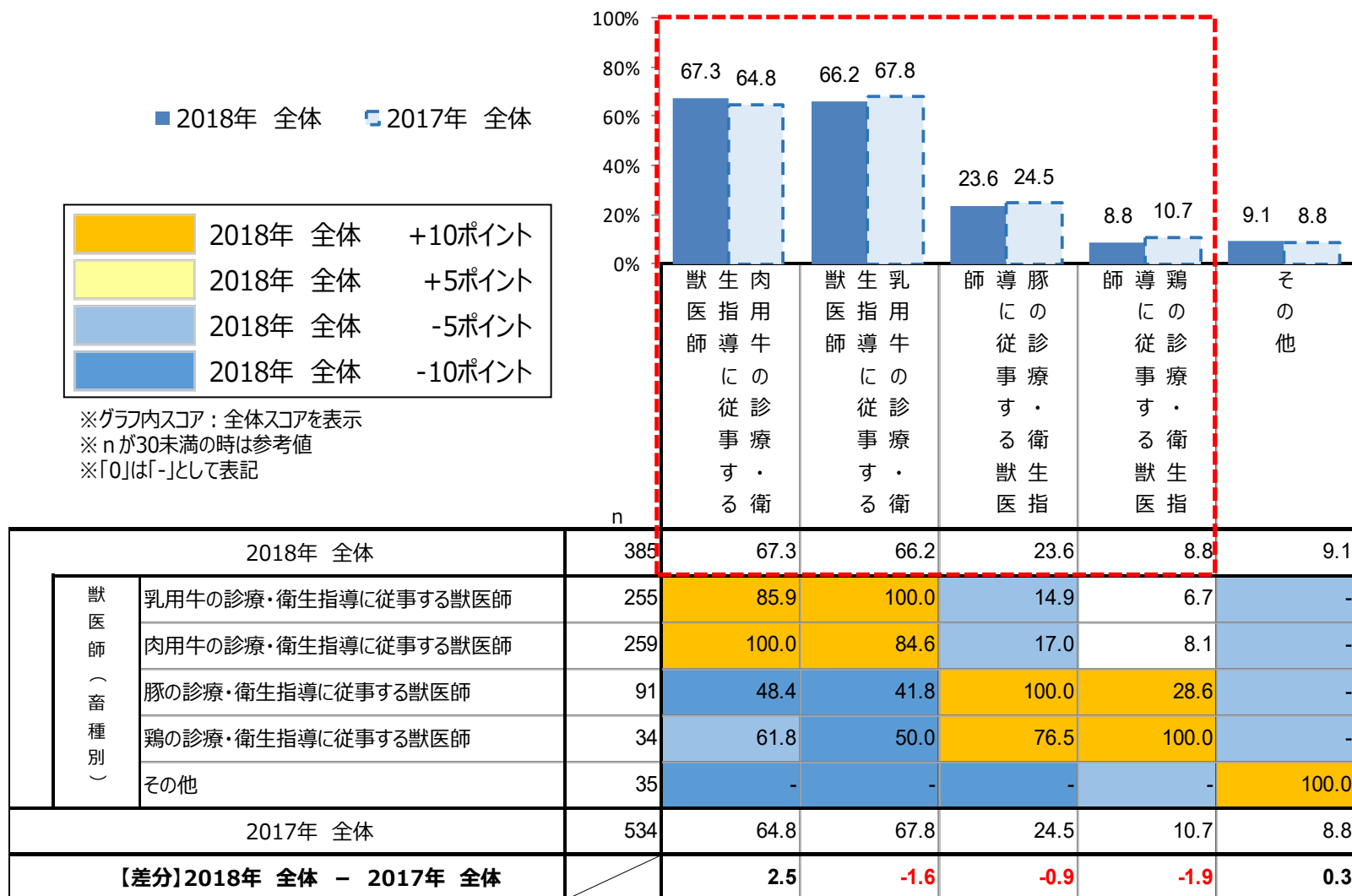
# 獣医師の種別

## ■「獣医師の種別」は『乳用牛・肉用牛に従事する獣医師など』が最も多く、それぞれ6割半ばに達する。

- ▶ 全体では「肉用牛の診療・衛生指導に従事する獣医師」が最も多く67.3%、次いで「乳用牛の診療・衛生指導に従事する獣医師」66.2%、「豚の診療・衛生指導に従事する獣医師」23.6%、「鶏の診療・衛生指導に従事する獣医師」8.8%が続く。また、前回と大きな差はみられない。

n=全体（単位：%）

Q2. あなたは次のどれに当たりますか。（複数選択可）



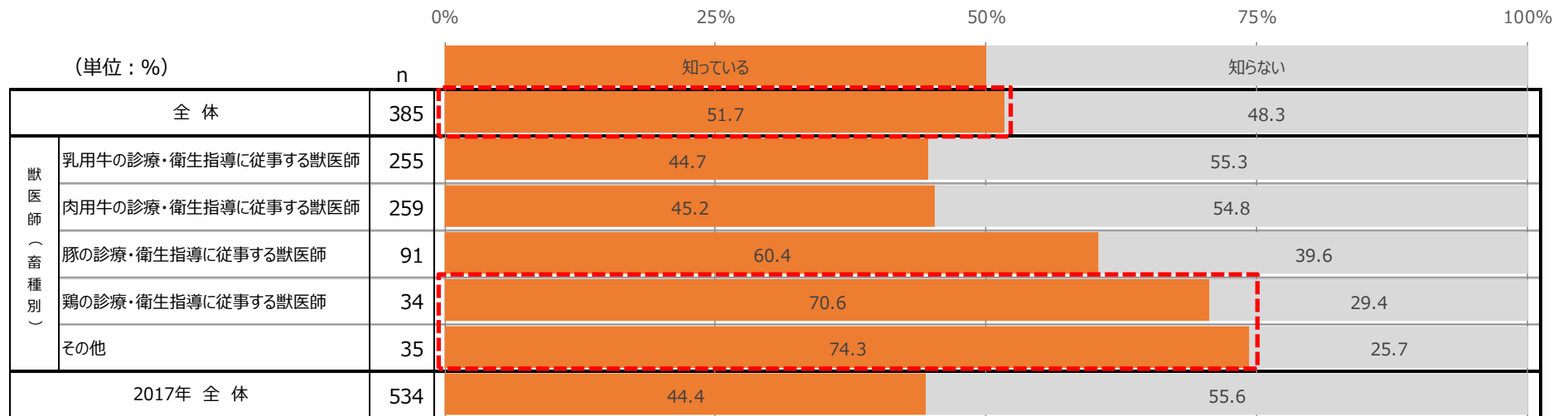
# 「薬剤耐性対策アクションプラン」への認知

## ■「薬剤耐性対策アクションプラン」への認知は5割、『鶏に従事する獣医師』などが高く7割以上を占める。

➤ 全体では「知っている」が51.7%を占める（前回調査から+7.3pt）。畜種別では『鶏に従事する獣医師』と『その他』が高く7割以上を占める。

Q3. 平成28年に定められた日本の薬剤耐性対策アクションプランをご存知ですか。（1つ選択）

n=全体（単位：%）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

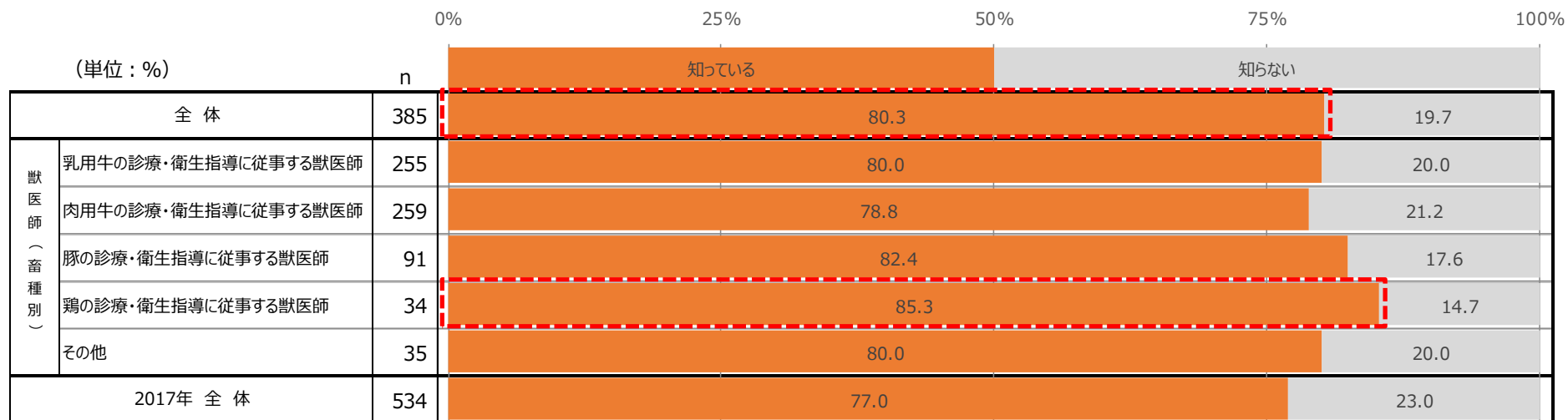
# 「動物用抗菌性物質製剤の慎重使用に関する考え方」への認知

## ■「慎重使用に関する基本的な考え方」への認知は8割、『鶏に従事する獣医師』が高く8割半ばを占める。

➤ 全体では「知っている」が80.3%を占める（前回調査から+3.3pt）。畜種別では『鶏に従事する獣医師』85.3%がやや高く全体を5pt上回る。

n=全体（単位：%）

Q4. 「畜産物生産における動物用抗菌性物質製剤の慎重使用に関する基本的な考え方」（平成25年12月24日通知）をご存知ですか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

# 「抗菌剤の使用に対する選択・使用量」への意識

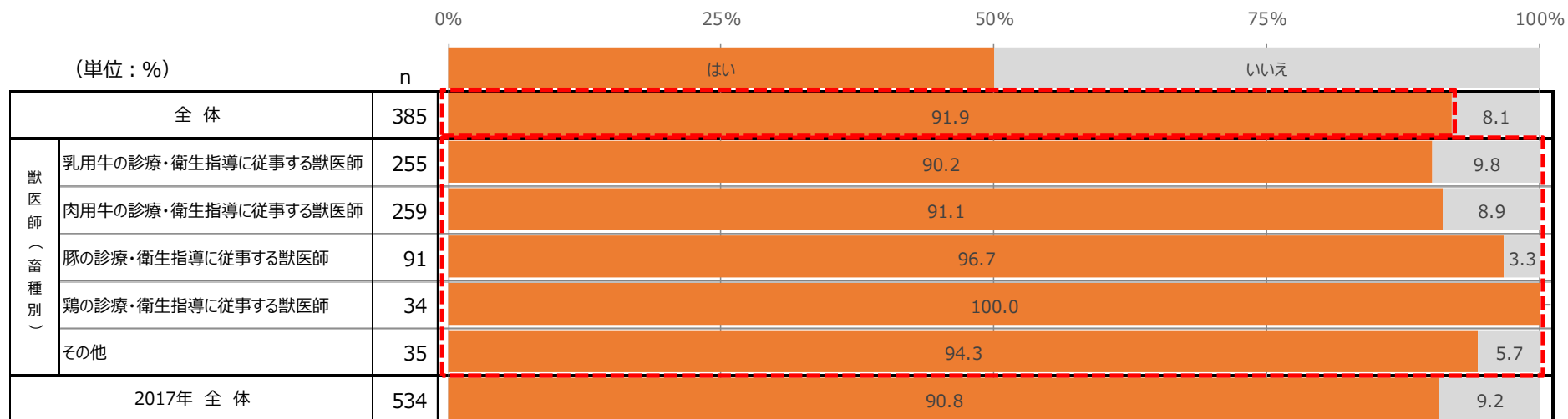
## ■「抗菌剤の使用に対する選択・最小限使用量」への意識は『はい』が9割を占める

➤ 全体では「はい」が91.9%を占める（前回調査から+1.1pt）。畜種別ではどの種別層も意識が高く9割以上を占める。

Q5. 「適切な診断に基づいて抗菌剤の使用を真に必要な場合に限定する、

そして、使用する必要がある場合は、有効な抗菌剤を適切に選ぶとともに、必要最小限の使用量とする」ということを日頃の診療において心がけていますか。（1つ選択）

n=全体（単位：%）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

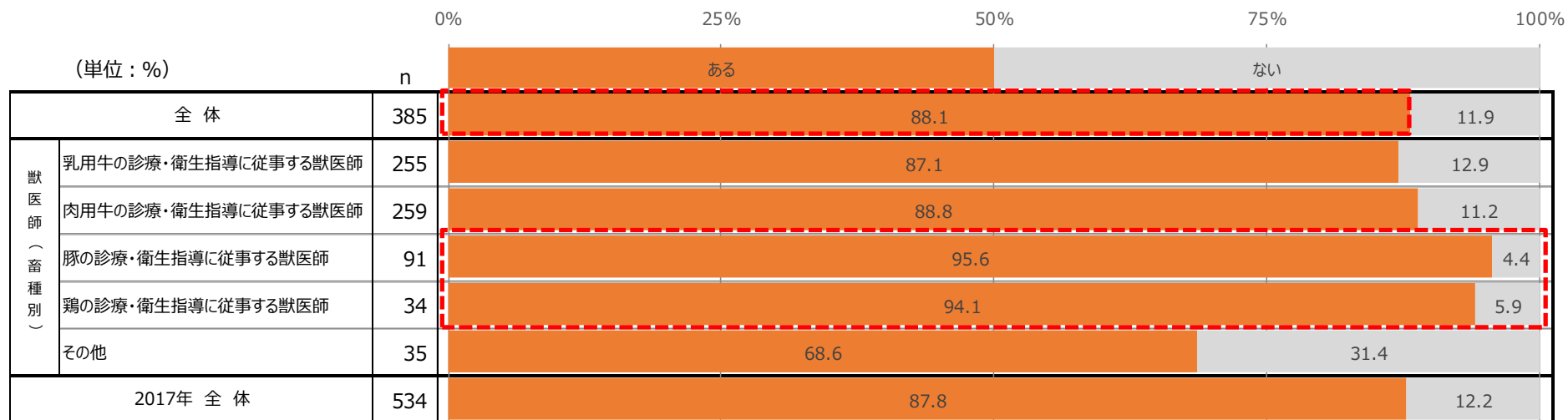
# 「抗菌剤の使用減少に対する飼養環境の改善やワクチン使用」への指導経験

## ■「飼養衛生管理の改善やワクチンによる感染症予防」への指導経験は『ある』が9割弱を占める

➤ 全体では「ある」が88.1%を占める（前回調査から+0.3pt）。畜種別では『豚に従事する獣医師』『鶏に従事する獣医師』が特に高く9割半ばを占める。

n=全体（単位：%）

Q6. 抗菌剤の使用する機会を減らす目的で、飼養衛生管理の改善やワクチンによる感染症予防を指導したことがありますか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

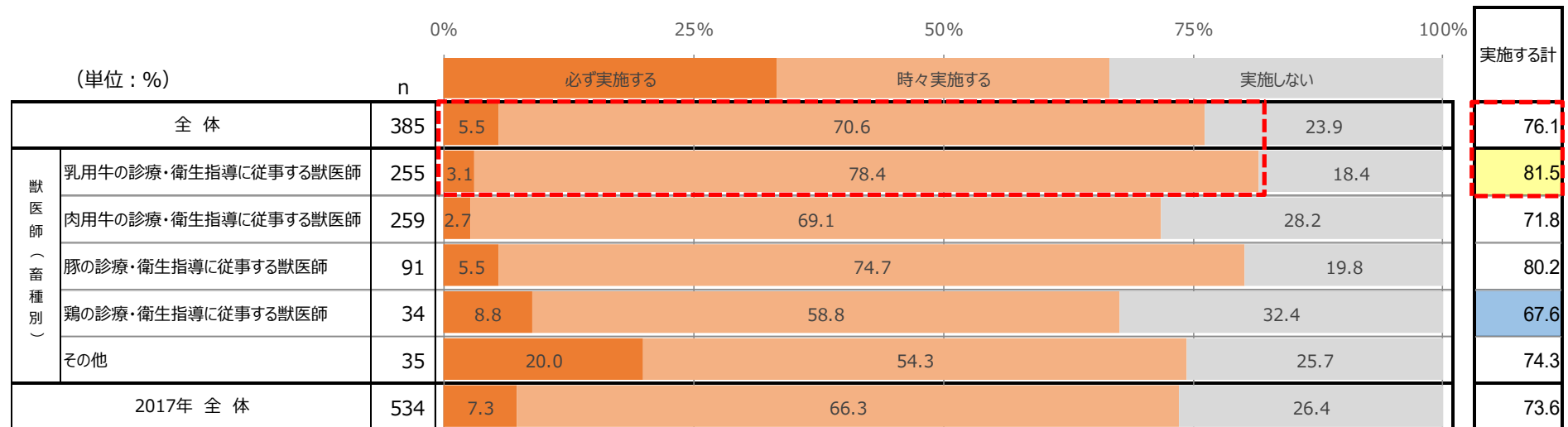
# 「薬剤感受性試験」への実施状況

## ■「薬剤感受性試験」の実施は約7割半ば、そのうち『時々実施する』が大半を占める

- ▶ 全体では「実施する計（必ず実施する：5.5% + 時々実施する：70.6%）」が76.1%を占める（前回調査から+2.5pt）。畜種別では『乳用牛に従事する獣医師』が最も高く81.5%（必ず実施する：3.1% + 時々実施する：78.4%）を占める。

n=全体（単位：%）

Q7. 日々の診療において、抗菌剤の使用に当たり、薬剤感受性試験を実施していますか（抗菌剤の使用後に実施する場合を含む）。（1つ選択）



※実施する計：「必ず実施する」+「時々実施する」

※2018年 全体比10pt以上を■、5pt以上を■、5pt以下を■、10pt以下を■で表記 ※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記

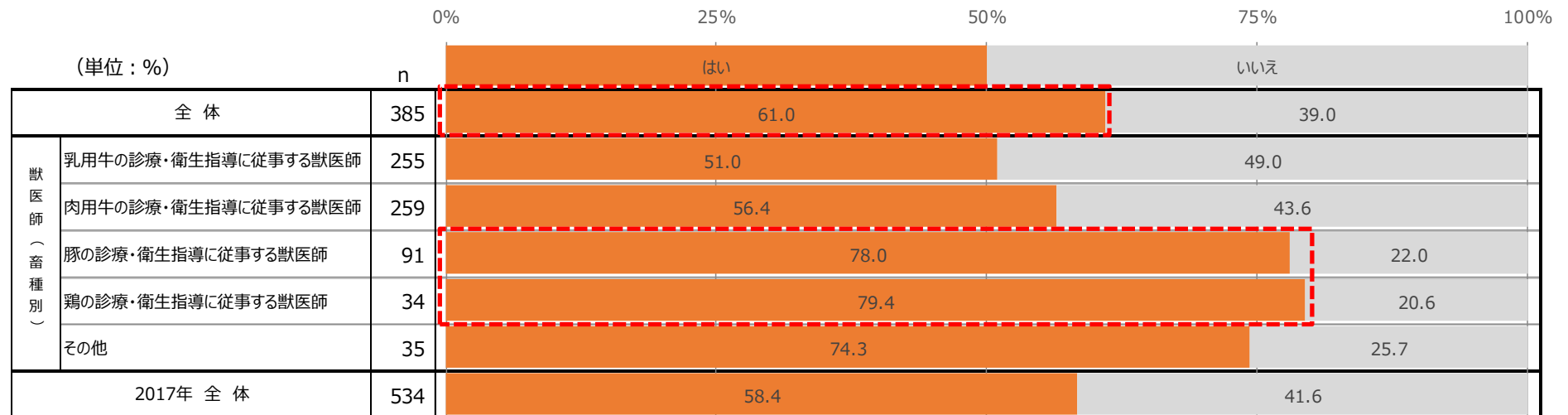
# 「抗菌性飼料添加物に対する種類」への認知

## ■「飼料の抗菌性飼料添加物に対する種類」への認知は6割、『鶏・豚に従事する獣医師など』が高く8割弱を占める

- ▶ 全体では「はい」が61.0%を占める（前回調査から+2.6pt）。畜種別では『鶏に従事する獣医師』が最も高く79.4%、次いで『豚に従事する獣医師』78.0%が続く。

n=全体（単位：%）

Q8. 抗菌剤を用いた治療において、飼料にどのような抗菌性飼料添加物（飼料工場で配合される抗菌剤）が混ぜられているかを意識していますか。（1つ選択）



※nが30未満の時は参考値 ※「0」は「-」として表記